

浄土真宗では、ありがたい念仏者のことを妙好人と呼び、ほめたたえています。その妙好人の一人に、名前を源左(げんざ)といって、このような話が残っています。

ある日、源左さんが夕立ちにあい、びしょ濡れになって帰って来ました。その姿を見た村人が「よう濡れたのう、大丈夫か」と尋ねると、源左は「ありがとうござんす、鼻が下を向いとるで有難いぞなあ。」と答えました。

この短いやりとり、皆さんはどのように感じましたか。私たちは、鼻が下を向いているなんて気にとめず、まして有難いと思わずに生活していることでしょうか。しかし、源左さんは夕立ちにあつて、気づいたのです。「鼻が下に向いとる」ことの有難さに。もし、「鼻が上に向いとる」のなら、雨が入って大変なことになります。その一見すると当たり前のことをよろこんでおられるのです。

本願寺八代目の蓮如上人のお言葉に、『ひとたび仏法をたしなみ候う人はおほやう(おおらか)なれどもおどろきやすきなり』とあります。

仏法に縁あつたならば、私は様々な支え・お陰を頂きながらここに存在しているという事実気づかされます。それによって、もよおされるのは、ひとつひとつの出来事は驚きであつて、よろこばずにはおれない事ばかりだったということなのです。

今一度、私たちは、周囲を見渡し見直してみませんか。例えば、朝、目が覚めること。食事がおいしく頂けること。お腹に入つたものが外に出てくれること。これまで、あれもこれも当たり前前と見過ごしていたものが実はどれも素晴らしく、有難いものとして受け取っていただけるのではないのでしょうか。そして、その思いを大事にとどめていきたいものです。

